

『「違い」を知って作る「自分のものさし」』

学校名・名前・担当教科：兵庫県立夢野台高等学校 阿部 恵子（家庭科）
実践教科：人権学習・家庭科・総合的な学習の時間
指導時数：5 時間
対象学年：高校 1 年生 対象人数：240 人

< 教師海外研修を通して感じたこと >

JICA の取り組みについては以前から関心を抱いていた私であったが、語学力と知見の不足で生じる自信の無さが足を引っ張り、これまでは「開発教育」という教育活動さえ、遠巻きに見ていたところがあったように思う。

日本が中国に行く ODA について学んだ 9 日間は非常に内容が深く、常に学びと気づきの連続で「百聞は一見に如かず」ということを改めて感じた。研修への参加に理解を示し、その成果に耳を傾け授業実践に協力して下さった職場の先生方の様子、そして昨今の国際情勢から、開発教育の果たす役割が重要性を増しているのではないかと感じている。

教師海外研修に参加して私は、ココが変わった！

BEFORE

多感な時期に教科書検定問題でアジア世論が揺れる様子を見てきた世代であるため、歴史認識の点において過剰な自虐意識があった。

最近の中国に関する外交上の問題とその報道に、生徒が何を感じどのように影響を受けているのか不安に思うところがあった。

ODA の現場は報道を通じてしか見たことがないため、時折沸き起こる ODA 廃止論に対し、議論できるだけの材料を持っていなかった。

AFTER

国内で働く中国人に対し、気軽に声を掛けられるようになった。

授業実践に向け準備する過程で、中国の抱える課題に目が向くようになり、客観的な視点で、この隣国との関係を捉えるようになった。

日本がこれまでどのような対中 ODA を行ってきたかを知って納得できた。また、経済成長の著しい中国ではあるが、「縁の下の力持ち」という存在があってこそ、発展の恩恵は人々に還元されていくのだと思うようになった。

授業の詳細

1. カリキュラム

(1)実践の目的/背景

これまで調理実習や食品衛生の授業をする時、生徒の間から出て来る中国に関する発言に、拭いようのない意識が、何かを通じて彼らに植え付けられているのではなかろうかと、私は感じるがあった。確かに、2002年の冷凍ほうれんそう農薬検出事件に端を発した中国の食品安全に関する報道は衝撃を与えるものであったろう。しかし、わが国の食料自給率の低さを棚に上げての中国批判に、若い世代が安易に同調するさまは、私たち大人の傲慢さを写し取ったかのようにも見える。また最近、外交上の諸問題の報道を受けて、さらに否定的・攻撃的な見方をする若い世代が増えているようで不安を感じてしまう。

日本人のこのような意識状況をもたらす背景には、自然的・地理的・歴史的諸条件など広義の Cultural background を有し「気心の知れた間柄」の中で暮らしてきた我が国の特質、とする見方もある。日本は複数の民族と文化の融合体であるものの同質性や均質性が高くなる社会であることは否定できない。実際、本校にも中国と深い関わりのある家族構成を持つ生徒が複数在籍するが、本校のように穏やかな学校であっても、関係を周囲に悟られまいとする生徒もいるほどである。地球規模で影響を与え合う「相互依存」の関係にある世界の中で、特性や文化を言い訳にした意識や感覚は、これからの足枷となりはしないだろうか。

アイデンティティーを考えることは、自分が所属しない領域との違いを区別することに始まる。その際、偏った情報が抽入されると区別は差別へと変質する。エスノセントリズムなどはその典型であって、過去にこの国で起こった失敗が繰り返されないようにするためにも、高校生という知的発達著しい時期にこそ、世界の国々について歴史や伝統・社会背景などさまざまな視点から捉え、多元的な価値観を尊重できるようになるよう丁寧に導く作業が必要と言える。

そして、その方法として「開発教育」を取り上げ、「家庭科」を連携させることは有効であると考えられる。定義は他に譲るとして、「開発教育で考える」ということは、「地球市民の生活について心を寄せ、当事者意識をもって諸問題の解決を考える」ということであり、家庭科教育の目指すところである生活者としてのシティズンシップ教育と相通じるものだと考えるからである。また、さまざまな学習の機会、特に「人権学習」や「総合的な学習の時間」とつながりを持たせ、生徒を中心に据えて丁寧に授業展開していくことが大切と考える。

(2)授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1～2時限目 地球市民になるために	プリントワーク ・私達が陥りやすい「思い込み」を体験的に理解するグループディスカッション ・自己概念形成に人間関係がどう影響を与えるのか ・ステレオタイプなものの見方と人権感覚を考える 兵庫県教育委員会事務局人権教育課主任指導主事による講話 「多文化共生社会の創造のために」 ・県下の日本語指導が必要な外国人児童生徒について ・人権の視点から見た教師海外研修（中華人民共和国） ・よりよい子ども多文化共生社会の創造のために	・プリント ・写真資料 ・パワーポイント

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<p>3時限目</p> <p>「中華」を堪能 -衣食から学ぶ 中国の地理と歴史-</p>	<p>①「中華」という国名の意味するところを考える</p> <p>②世界における中華料理の位置づけを知る</p> <p>③食から考察する中国の地理的背景 ・料理と各地域の風土 ・「三逃の大地」、内陸乾燥地域と苳麵 ・アジアにおける文化要素の共通性 -茶・稲・発酵・絹-</p> <p>④服飾から考察する中国の多様性と歴史 ・呉服の「呉」とはどういう意味か ・中国の服飾史を概観する ・背広の源流は蒙古にあり？！ ・被服の素材(綿・麻・絹・毛・カシミヤ)を観察</p>	<p>・地図</p> <p>・教材プリント ・食べ合わせポスター ・NHKビデオ映像 「人間は何を食べてきたか」 ・苳麵の写真</p> <p>・呉服 ・中国の書籍 「中国伝統服飾図鑑」 ・NHKビデオ映像 「ファッションドリーム」</p>
<p>4時限目</p> <p>中国・内蒙古 Now 砂漠化の現状とその背景</p>	<p>①ワークシート 「買い物チェックリスト 繊維製品編」</p> <p>②フォトランゲージ「内蒙古自治区」 ・内モンゴルの現状について感じたことを記述する</p> <p>③グループ討議「内蒙古自治区の砂漠化の原因とは」 ・砂漠化がなぜ進行したのか</p> <p>④フォトランゲージ「私たちの生活と内蒙古自治区」 ・砂漠化の原因に私たちの生活が関与したことに気づく ・砂漠化が進行するとどうなるのかを考える</p> <p>⑤ブレインストーミング「STOP！砂漠化」 ・砂漠化を止めるために何が必要か考える</p> <p>⑥スライドショー「比べてみよう 内蒙古と北京」 ・映像比較をもとに、中国内陸部と沿岸部の格差を知る ・若い世代が街に出て行く背景を考える</p>	<p>・ワークシート ・カシミヤ製品</p> <p>・写真</p> <p>・葛根湯 ・カシミヤ製品の広告 ・内モンゴルの白布</p> <p>・付箋、色ペン、模造紙</p> <p>・パワーポイント ・資料「高校生の日常生活に関する調査-日本・米国・中国の3カ国の比較-」</p>
<p>5時限目</p> <p>国際協力について 考えよう</p>	<p>①前時「STOP！砂漠化」の総括</p> <p>②スライドショー「JICAが行う砂漠化防止の支援」</p> <p>③スライドショー「日本が中国各地で行う政府開発援助」 ・JICAの役割とJICAがおこなう国際協力を知る ・政府開発援助(ODA)の内容と歴史について理解する ・国際協力が、先進国たる資格であることに気づく</p> <p>④フォトランゲージ「日本救援隊黙哀」 ・中国人の心を動かした写真にみる、日本の「礼」 ・「支援」の根底にあるものは何なのか考える</p> <p>⑤グループワーク／作文「わたしにできる国際協力」 ・JICAの地域別取り組みについて知る ・各団体の行う国際協力とJICAの関わりを知る ・「人による支援」の大切さ、自分にできる協力を気づく</p> <p>⑥地球市民として考えよう ・課題を身近にとらえる「当事者意識」の大切さに気づく</p>	<p>・パワーポイント</p> <p>・日本の新聞記事</p> <p>・中国の新聞記事</p> <p>・JICA要請一覧 (青年海外協力隊) ・NGO団体資料</p> <p>・ワークシート 「直径1.5mで考える地球」</p>

2. 授業の詳細

1～2時限目 「地球市民になるために」

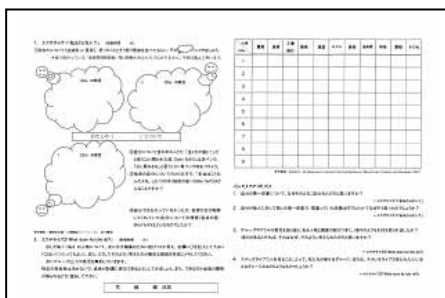
目標

ホームルーム活動の人権学習を活用し、一連の授業を行う前の意識付けを行う。

内容（詳細は永峰教諭の頁を参照）

1時間目（各クラスで実施）

私たちが陥りやすい「思い込み」を体験的に理解する。
ステレオタイプなものの見方がもたらす影響を考える。



1時間目に用いたプリントと資

生徒の反応

1時間目の授業では、生徒の発言が活発に行き交った。特定の人種と職業を結びつけて考える傾向があると気づいた様子であった。

2時間目の講演は、多様なものとの見え方の必要性を実感した様子であった。

2時間目（学年全体で実施）

兵庫県教育委員会事務局人権教育課 永峰恵介教諭の講話

「多文化共生社会の創造のために」

- ・県下の日本語指導が必要な外国人児童生徒について
- ・人権の視点から見た教師海外研修（中華人民共和国）
- ・よりよい子ども多文化共生社会の創造のために



兵庫県教育委員会指導主事の講話

生徒の感想

- ・私個人の考えや常識が全てなのではなく、周りの意見や考えも知るの大切だと思った。
- ・顔や肌の色によって、自分が少し違う見方（＝「偏見」）を持っていることに気がついた。
- ・時代が変われば外国人の子どもが日本の学校で勉強することも多くなり、支援がいると思った。
- ・家族や友達、世界の人々と心でつながれるようになってほしいと思いました。

3時限目 「「中華」を堪能 衣食から学ぶ中国の地理と歴史」

■目標

中華思想のバックグラウンドを理解するために、中国の多様性を地理的・歴史的見地から考察する。それらを通して、わが国と中国との長い関わり合いを再認識する。

■内容

- ①「中華」という国名の意味するところを考える
- ②世界における中華料理の位置づけを知る

生徒の反応

英語科と国際理解教育係に協力を戴き、事前実習として本校 ALT を囲んでワンタン作りを行った。カナダ人として育った彼が中華料理を大切に捉えていて、その話と手際よく作る姿に生徒は多くを学んだ様子だった。

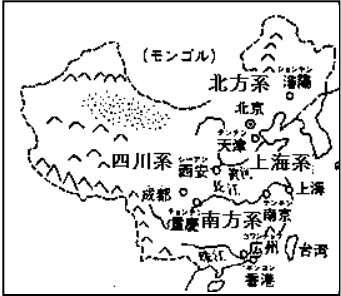


事前実習：中国系カナダ人 ALT とのワンタン作り

③食から考察する中国の地理的背景

- ・料理が各地域の風土と密接に関わっていることを知る。
 北方系料理： 宮廷料理として発達した北京料理など。
 寒冷地なので肉や油脂を多く用いた料理や鍋料理が有名。
 小麦粉を用いた包子、麺も常食とされている。
- 南方系料理： 広東を中心とした料理を指す。北京に匹敵する長い歴史をもつ地域で、亜熱帯で産物が豊富。古くから外国や各地とも交易が盛んで特に北京要人たちの往来が多く、これにより北京の調理技術が導入され広東料理を作り上げた。ふかのひれ、つばめの巣、くまの手など、特殊なものが料理の材料として珍重される。
- 上海系料理： 河や海に面しているので魚介類の料理で有名。産物が豊かで特に米の主産地であるため、米飯に合う料理が多い。各国の租界があったので、広東料理と同様、洋風の影響を大きく受けている。
- 四川料理： 長江上流の山岳地帯にある盆地、四川省。この首都である成都を中心とした料理。海から遠く隔たった地域なので海産物は少なく、漬物など食品の保存加工が発達した。また風土病の多かった地域なので、香辛料や薬味をたっぷり使った刺激の強い料理が特徴。

生徒の反応
 なじみある中華料理を題材に用いたため、盛り上がった。料理自体を知っているため、風土の違いが理解しやすかったようだ。



- ・苳麵の写真を見てその調理法と食べ方の特徴を考える。



蒸しがあがった苳麵



羊肉の入ったつけ汁

<ココがポイント>
 非常に腹持ちが良く、穀類・野菜が多くない乾燥地域の大切なビタミン・ミネラル源でもある。

「三逃の大地」
 中国山西省の黄土高原は痩せた土壌で、肥料も種も土も残らない「三逃の大地」と呼ばれ雑穀しか育たない。雑穀をいかに食べるかという工夫の中から麺が誕生したと言われる。小麦が多く採れないこの地域で古くから食されてきた苳麵(ゆうめん)はオート麦(燕麦)を原料とする。小麦粉のように細長く加工、調理することが難しいため、ところてんのように押し出して成型し、茹でずに蒸して用いる。

- ・「三逃の大地」と言われる山西省や内蒙古自治区などの、内陸乾燥地域の厳しい自然環境を知る。
- ・茶、稲作、発酵、養蚕等の文化要素は、古くから中国雲南省を中心として西はインドのアッサム地方やブータン、東は中国の湖南省にかけて共通している、という見方も知る。

④服飾から考察する中国の多様性と歴史

- ・「呉服 = 呉から伝わった綾織」であることを知る。

<ココがポイント>
 大阪府池田市室町の**呉服(くれは)神社**は、機織(はたおり)と縫製を伝えるため大陸から渡った2人の織姫が祀られる。

<ココがポイント>
 漢民族の王朝(漢・唐・宋・明) ゆったりとした**寛衣形**
 その他の民族の王朝(元、清) 身体にぴったり合う**窄衣形**
 (馬上の動作が容易な騎馬民族様式)

- ・中国各王朝の服飾をスライドショーで概観する。
- ・背広の原型が、中央アジア騎馬民族の衣装に遡ることを知る。
- ・中国が多様な民族から成り、それぞれに優れた技術や文化があったことを理解する。
- ・被服素材(綿・麻・絹・毛・カシミア)に触れ、特徴や感じたことをプリントにまとめる。

◎生徒の感想
 ・中国の人が「私は中国の全てを知っているわけではないですが」と言う、その意味が分かった。

4 時限目 「中国・内モンゴ Now」

■目標

内モンゴ自治区の現状を例にあげ中国の抱える課題を知り、その背景を考察する。
また、その課題が私たちの生活と無関係ではないことに気付き、地球規模の環境保全問題として私たちが共に取り組むべき課題であることを理解する。

内容

ワークシート「買い物チェックリスト 繊維製品編」

フォトランゲージ「内モンゴ自治区」

- ・下の写真を見て、現在の内モンゴ自治区がどのような場所であると思うか記述する。



中央分離帯上の風力発電装置



杭锦旗 新しいプラントの建設



羊を連れた牧民

グループ討議「内モンゴ自治区の砂漠化の原因とは」

- ・写真 から、日本列島がすっかり入る面積の内モンゴ自治区で何が起きているのかを考える。

フォトランゲージ「私たちの生活と内モンゴ自治区」

- ・この地域では、昔から自然に感謝する思想があることを知る。
- ・ワークシート をもとに、私たちの生活や意識も砂漠化の進行に関与したことに気付く。



天や地に感謝を捧げる習慣



カシミア製品の広告

<ココがポイント>

内モンゴの砂漠化の要因

自然環境...薄い土壌で、一度緑性が失われると自然回復が困難。
政府の方針...漢民族の移住
計画なしの開墾 遊牧民の生活場所が限定 定住し開墾が進む

ブレインストーミング「STOP! 砂漠化」

- ・砂漠化を防ぐために必要な条件と手立てを考える。
- ・できるだけ多く思い浮かべた後、意見を整理する。

スライドショー「比べてみよう 内モンゴと北京」

- ・内陸部と沿岸部の所得格差や生活水準の格差を知る。
- ・中国の一人っ子政策と過熱する早期教育の現状を知る。
- ・若い世代が街に出ていこうとする、その背景を考える。

生徒の反応

授業の始め、カシミアの手触りに喜んでいたら生徒は、「こんなこと知らんと買ったら恥やったわ。」と授業の終わりには呟いた。

生徒の感想

- ・過放牧により家畜が植物の根まで食べてしまって育たなくなる、ということは知っていたけど日本列島がすっかり入る広さの土地で、これほどまで砂漠化が進行しているとは思わなかった。
- ・こんなに砂の多い場所に住むのは容易ではないだろう。自分なら、街に出ていく選択をすると思う。でも、人が住まなくなると砂漠化はどんどん進んでいくだろう。

5 時限目 「 国際協力について考えよう 」

■ 目標

開発途上国の経済・社会の開発、復興、安定に寄与する政府開発援助(ODA)について知り、日本が世界で行っているさまざまな国際協力を身近なものとしてとらえる。

内容

前時のブレインストーミング「STOP! 砂漠化」総括

スライドショー「JICA が行う砂漠化防止の支援」

- ・ JICA (独立行政法人国際協力機構) が行う内モンゴル自治区での砂漠化防止の支援を知る。



技術協力
(草原における環境保全型節水灌漑モデル事業)



有償資金協力
(内モンゴル自治区植林植草事業)



無償資金協力
(リハビリ用可動式調理台)
* 左下に JICA 印がある

スライドショー「日本が中国各地で行う政府開発援助 (ODA)」

- ・ 戦後の日本も諸外国の援助を受けた歴史を知り、支援が先進国の役目であることに気づく。
- ・ わが国の政府開発援助の内容・特徴を知る。
- ・ 日本の行う ODA が、関係者に感謝されている様子を知る。

フォトランゲージ「日本救援隊黙哀」

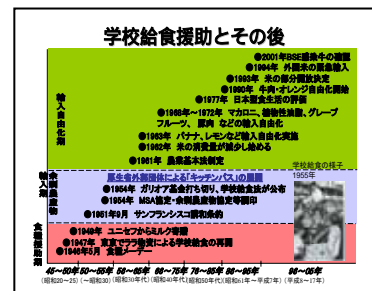
- ・ 四川大地震被災地における日本の国際緊急援助隊の写真を見る。
- ・ 中国人の反応を紹介、なぜ彼らが感動したのかを考える。
- ・ 「支援」の根底にあるべきものは何なのか、を考える。



新華社通信の伝えた映像

グループワーク / 作文「わたしにできる国際協力」

- ・ 日本が受けた援助の一つ「学校給食」を例に、続き方によって、援助も様々な見方につながってしまうことを頭に入れる。
- ・ 「望ましい支援」とはどういうものか、それぞれ意見を述べる。
- ・ JICA の地域別取り組みと支援を知る。
- ・ 青年海外協力隊の要請一覧を見て、各開発途上国が必要としている「人による支援」について知る。
- ・ 各 NPO 組織の行う国際協力と JICA の関わりを知る。



給食援助とその後

地球市民として考えよう「直径 1.5m サイズで考える地球」

- ・ 環境問題をはじめとした地球規模の諸課題を身近なものとして意識する。
- ・ 相互に依存する世界の中で、一国だけが繁栄を享受するわけにはいかないことを理解する。
- ・ 世界の中の日本の立場と役割を考え、問題解決への姿勢を養う。

生徒の感想

- ・ 意見が食い違っても、お互いを理解しようとするれば仲直りだってできるし、上手くやっていると。言葉足らずで誤解しないようにしないと。いけない。
- ・ 技術とか資格があるというんな貢献ができるから、そういう方向もいいのかもしれないと思った。
- ・ 世界のいろんな人たち、彼らが何を幸せとするのか知って、私は「自分のものさし」を作りたい。

◎所感

あるクラスで「内蒙古自治区における砂漠化の原因は何？」と問いかけたところ、「地球温暖化」「焼畑農業」などの回答が出てきて戸惑いを覚えた。受験で詰め込み覚えた事項が、連動した「知」となっていないことの現れなのかと思った。フォトランゲージの手法を繰り返して用いることで的外れな議論に終始することなくスムーズに進められるようになったが、他にディスカッションやブレインストーミングも取り入れたため、一つの事をより深く議論できなかつたと感じた生徒もいたようだった。多元的な価値観を尊重する態度を育むためにも、互いの意見を聴き、表明し合う「議論」という場は大切であるから、これを上手く設けるゆとりと技量が必要だと感じた。

3. 成果と課題

我々の生活が世界との相互依存の上に成り立っていることを伝える機会が、私の担当する家庭科の中には数多くある。そのため、教科の中に研修の成果を組み込むことは難しくはないと感じていて、開発教育を家庭科に特化してみたいという思いさえあった。ところが、授業実践の頃と中国との間で外交上の諸問題が発生した時期とが重なり、授業の本来的な目的が曲解されそうな不安を感じるようになった。そのため思い切って展開を変え、人権学習や総合的な学習の時間を活用することとしたが、そのことが授業の幅を広げることにつながったと実感した。

授業を進めていて、生徒たちが、中国と関わりある生徒の喋る美しい中国語の発音に感嘆の声をあげ、純粋な興味から様々な問いかけをしている様子を目にした時、彼らの中に「違いを素直に受容できる『可塑性』」を感じ、これが私には大変な励みとなった。また、「なぜこの授業をするのですか？」と言いつつも、中国語を披露してくれた生徒のいきいきとした眼差しに、私の中にあった不安感が拭われた気持ちがあった。そして、中国を理解するために文化をはじめとした様々な比較を行ったが、その要素を追求する過程において、先達がどのように創意工夫を重ねて継承・発展させてきたのかを改めて知ることになり、はからずも自国の肯定に繋がったと感じている。

内蒙古師範大学で日本語教員として活躍されている、青年海外協力隊の安田隊員のお力添えで、師範大学生との手紙を通じた交流も始まっている。お互いが尊重し合うこの関係を長く継続させていくことを課題とし、開発教育実践の裾野に位置する一人として今後も研鑽を積んでいきたい。

参考資料

授業実践 1～2 時間目

『地球市民を育む学習 Global Teacher、Global Learner-』中川喜代子、明石書店

『地球の食卓 世界 24 カ国の家族のごはん』ピーター・メンツェル、TOTO 出版

授業実践 3 時間目

『食の倫理を問う』安本教傳、昭和堂

『日本料理文化史』熊倉功夫、人文書院

『中国伝統服飾図鑑』李薇、東方出版社

『日本女性服飾史』井筒雅風、光琳社出版

授業実践 4 時間目

『高校生の日常生活に関する調査 日本・米国・中国の 3 カ国の比較 』(財)一ツ橋文芸教育振興会

授業実践 5 時間目

『中国全省を読む地図』莫邦富、新潮社

『青年海外協力隊 要請一覧』JICA

『家庭科教育 68 巻 14 号』家政教育社